

史跡慧日寺跡金堂内復元展示物

完成記念

福島県磐梯町

ごあいさつ



磐梯町長

五十嵐 源市

東国の仏教文化黎明期において拠点寺院の一つであった慧日寺は、霊峰磐梯山を望む山麓に、南都法相宗の学僧徳一によって創建されました。

徳一は、この地を礎として、広く仏の教えによって衆生を救済したといわれております。

その救済の中心に据えた尊像が、金堂に安置されていた薬師如来坐像でした。

この薬師如来坐像は、造立以来幾度となく火災や戦火に見舞われながらも、篤い信仰に支えられ、その都度再興を繰り返してきました。しかしながら、廃寺後の明治5年に火災によって焼失して以降は再興されることなく現在に至っております。

廃寺後の寺跡は昭和45年に国の史跡指定を受け、その後の長年にわたる発掘調査成果と住民の熱意により、平成21年までに伽藍の中樞を構成する金堂・中門並び石敷き広場を復元整備いたしました。

中心伽藍である金堂等の復元を契機に、金堂内に立体的な展示物を整備することにより往時の雰囲気醸し出され、来訪者からも史跡慧日寺に対する理解を一層深めていただけるのではないかと、ひいては史跡の保全と活用の促進にも結び付いていくのではとの気運が高まりました。こうした中で、国・県、町議会のご理解と多くの方々のご支援を受け、薬師如来坐像の復元制作に着手する運びとなったところであります。

しかし、失われた薬師如来坐像の復元は、金堂の復元同様に難しいものでした。このため、平成26年度に我が国の仏像研究の最先端を歩む先生方をお迎えし、「史跡慧日寺跡復元金堂内展示物調査・検討専門委員会」を立ち上げ、専門的な立場から調査、研究、検討を重ねていただきました。

その成果を受けて平成27年から関係諸機関のご支援の下、東京藝術大学大学院保存修復彫刻研究室との研究連携により展示物の復元制作に着手いただき、以来3カ年をかけてここによりやく完成を迎えるに至ったところであります。

本日、みなさまへのお披露目にあたり、ご指導をいただきました専門委員会の先生方、制作にあたられました東京藝術大学のみなさま、さらには復元展示物制作にご理解とご協賛を賜りました多くの関係各位に対しまして、衷心より御礼を申し上げます。

多くの方々の知恵と技を結集して復元制作された薬師如来坐像が、慧日寺の歴史を雄弁に物語り、仏都会津のシンボルとして後世に引き継がれていくことを切に期待いたします。

平成30年7月30日



ごあいさつ

磐梯町議会議長

鈴木 久一

国指定史跡慧日寺跡の金堂内展示物「薬師如来坐像」が完成しましたこと、心からお慶び申し上げます。

会津仏教文化発祥の地として、徳一菩薩により開基されました慧日寺跡が、昭和45年に国史跡指定を受けてから半世紀をむかえようとしております。その間、発掘調査や建築物の考証を基にして、慧日寺伽藍の中心建物である金堂や中門の復元をされてきましたが、この度、3年の歳月を費やして、「薬師如来坐像」が完成し、慧日寺跡金堂内に展示されますことは、まさに創建当時を思わせるものであります。

金堂内展示物「薬師如来坐像」の復元事業は、今後の史跡整備や保存のみならず活用がはかられ、会津の歴史・文化を代表するシンボルとなるものと大いに期待するものであります。

結びに、金堂内展示物「薬師如来坐像」の復元にあたりまして、文化庁や福島県、史跡慧日寺跡調査保存整備指導委員会をはじめ多くの関係者の皆様に敬意を表し、お祝いのことばといたします。



ごあいさつ

史跡慧日寺跡調査・保存・整備指導委員会委員長

史跡慧日寺跡復元金堂内展示物調査・検討専門委員会委員長

濱島 正士

このたび、磐梯町皆様のご熱意と株式会社シグマ等のご支援によって、慧日寺金堂内に展示する薬師如来像の復元制作が完成しましたことは、まことに意義深いものがあると心からお慶び申し上げます。

慧日寺金堂・中門のように、失われた建物を発掘等の調査研究にもとづき復元再建することはほかの史跡等でも行われていますが、かつて堂内に安置されていた佛像の学術的な復元制作は、全国でも初めてのことではないかと思われます。

今回の薬師如来像の復元制作にあたっては、佛像彫刻の調査研究・修理制作に携っておられる第一線の研究者四氏にお願いして検討を重ね、試作品を制作した上で実施に至りました。その結果、慧日寺を開いた徳一が造ったであろう薬師如来坐像を彷彿させる像を再現することが出来たのではないかと思います。

この像を堂内に展示することによって、金堂の建立目的・機能が明確になり、堂内空間の在り方が理解できると共に、造形作品としての建築と彫刻の一体感を実感して頂けるものと思います。今後、史跡慧日寺跡の復元整備がさらに進展し、会津地方の歴史と文化をより深くご理解頂く上に、広く活用されることを期待いたします。



ごあいさつ

福島県知事
内堀 雅雄

国史跡慧日寺跡の金堂内復元展示物薬師如来坐像の完成を心からお祝い申し上げます。

また、薬師如来坐像の完成に御尽力いただいた磐梯町をはじめ多くの関係者の皆様の御労苦に心から敬意を表します。

慧日寺は、平安時代初期に徳一上人により開基された東北地方屈指の古刹と言われる会津仏教文化の中心となった大寺院であり、その慧日寺跡は、昭和45年に国史跡に指定された全国的にも著名な史跡です。

これまで、磐梯町において、金堂の復元、中門及び石敷き遺構の復元整備等が行われ、史跡慧日寺跡を中心とした仏教文化による地域の魅力向上が図られてまいりました。

この度、金堂内展示物である薬師如来坐像が完成しましたことは、これまで以上に往時の慧日寺を偲び、会津仏教文化を体感できるとともに、更なる地域の魅力向上につながるものと確信しております。

県といたしましても、文化は、私たちの心のよりどころとして、人々に生きがいをもたらし、地域の活力増進に向けた原動力になるものであると考えており、文化的資源を活かした地域の魅力づくりに取り組んでいるところです。

新たな魅力を加えた史跡慧日寺跡に多くの方が訪ねられ、会津の歴史や文化を肌で感じていただけることを御期待申し上げます。

結びに、磐梯町における文化の振興が一層図られ、地域の活性化に結びつくことを祈念し、あいさつとします。



福島復興如来のご出現

法相宗大本山興福寺 貫首
多川 俊映

福島県磐梯町では、国指定の史跡・慧日寺の復元整備が鋭意進められています。指定されたのが昭和四十五年と承っていますが、その後、史跡慧日寺の整備が、磐梯町の重点施策となり、現町長の五十嵐さんの時代になって、それが大きく花開いており、ご同慶に存じます。

平成二十年には、発掘調査の知見を基に金堂が復元され、またその後、中門や金堂前庭の石敷も復元され、九世紀に徳一菩薩が造営された慧日寺の寺観が着々とよみがえっていますことは、徳一菩薩と深い関係をもつ興福寺にとりましても、感無量です。

しかし、博物館施設としての整備とはいえ、金堂という建物だけでは、なにか物足りない……。そう感じておられる方も多いのではないかと思います。五十嵐町長さんも、そういう大方の熱い思いを感じられたのでしょう、ついにご本尊の薬師如来坐像の造像に踏み出され、ここに見事に完成されました。

行政上は、この薬師如来坐像も「展示物」とのことです。が、形式上そうであっても、今後慧日寺を訪れる人々は必ずや、この新しく造像されたお薬師さまに祈りをこめられるのではないかと思います。東日本大震災で殊のほか甚大な被害を受けられ、いまだ風評被害にも苦しんでいる福島です。そうした福島にとりまして、このご仏像は文字通り、福島復興如来ではないでしょうか。福島復興如来像のご出現、まことにめでたうございます。心からお慶び申し上げます。



来む世は磐梯の山のふもとに

法相宗大本山薬師寺 長騰
松久保 秀胤

福島県中央に雄峯そびえる磐梯山の山麓に、磐梯神社が延喜式内社として奉祀されていたことは明白であり、その隣接地に今日の慧日寺が創始された歴史は奈良時代に始まる。天武天皇十四年「家毎に佛舎を設けよ」と詔勅された史事は、近時の歴史的研究によって、国内の郡衙に郡家を設け、郡ごとに佛舎（堂）と正倉を整備することを勅令とした、と解釈されている。耶麻郡の郡家は磐梯神社に隣接して創設され、佛舎を勅令によって設けるべく寺地を設け、慧日寺の前身寺（金光明寺か）の寺域を設けたと推察される。

持統天皇八年（六九四）五月に『金光明經』四卷本百部、合計四百巻を百ヶ寺に送置され、「毎年六月に読誦し、布施は当国の官物をもってこれに充てよ」と勅令された史事からすれば、慧日寺の前身寺が存在したと推察される。徳一上人は、幼少期を奈良平城京内に渡世されたことは、師と仰がれた僧勸操が大和国添下郡額田部におられたからである。その師の師僧は道慈律師であり、道慈律師は平城京大安寺を唐朝風に営繕され、法相唯識・三論教学の道場とされた。道慈律師は渡唐中に中国僧義浄三蔵に師事。南インド系密教の彫像美に遭い、實叉難陀、善無畏三蔵の影響を受けた、唐代末期の則天武后による優美な彫造尊像に触発を受けられた。さらに新翻經典『薬師經』（七佛經）、新訳本『金光明經』（十卷本）、『根本説一切有部毘奈耶』百巻など、密教經典及び戒律經典など百巻を養老二年（七一七）請来された。それによって平城香薬師寺（新薬師寺）、大安寺観音像六軀に密教風須弥壇莊嚴が現出する。徳一上人は、新風の教学を身に受けられ、行基・道昭両菩薩の教学（三階佛教教学）による「慈善与施悲行」の実践履行を旨として東山道を北上され、慧日寺地域に到達される。磐梯山が噴火直後の山野廢墟と化した人民疲弊極度にある時、奈良に請来した密教教学の三世救済・庶民済愍の薬師如来を造像し、戒律堅固な僧院生活をもって律僧徳一上人が「盡衆生界不作佛」の誓願を祈祷された本尊像を基本として、今世紀の磐梯町総意による本尊像の入佛の慶事を迎えられることは「縁あらば吾もまた来む世は磐梯の山のふもとの清水の寺」徳一上人遺偈がよみがえる慶びである。



史跡慧日寺復元を寿ぐ

北法相宗大本山清水寺 貫主
森 清範

本日、徳一菩薩ゆかりの史跡慧日寺跡金堂が見事に復元完成し、本尊薬師如来が入仏安置されましたことは誠にめでたく、衷心よりお祝い申し上げます。

徳一菩薩が建立された寺々の中でも、この慧日寺は分けても陸奥国の名刹であります。『私聚百因縁集』という書によりますと、大同元年（八〇六）に「奥州会津石梯山に清水寺を建立す。会津大寺これなり」とあり、当初清水寺と号し、後に弟子今与という僧に和歌一首を添え授けたといひます。その歌に、“縁あらば我また今与石梯の山の脚の清水の寺”と詠まれております。まさに慧日寺は私も京都清水寺と清らかな水の縁で結ばれた寺であります。

慧日寺は会津の大寺として栄えましたが、その後の戦乱などで堂宇を失いました。この度、五十嵐源市町長の発案により行政では珍しい事業として今日の落慶を迎えたのであります。思うに、歴史は人々の息吹を吹き込んでこそ生きた歴史となるのであります。文化も伝統も人々の意識と注目が失われると消えてしまいます。

この度の復元によって徳一菩薩の精神がよみがえり、地域文化の格を示すことは東日本のみならず日本の誇りであります。ここに五十嵐町長、町民の皆さま、関係各位に深甚の敬意を表し、磐梯町の更なる弥栄を祈念申し上げます。



お祝いの言葉

大本山室生寺 座主

網代智明

史跡慧日寺跡金堂・復元薬師如来が完成されましたことを心よりお祝い申し上げます。五十嵐町長は金堂復元にあたり室生寺の金堂を模して建築されました。私が五十嵐町長に初めてお会いしたのは、平成25年に座主就任の年のことで、突然室生寺へ参拝に来られてご挨拶をいただいた時でした。以来毎年室生寺への参拝は欠かさずに来られております。ある時私が「お堂は立派に完成されましたが堂内は空間ばかりで寂しい思いです。中に収める仏像はおつくりになられますか」とお聞きしましたら「はい必ず作ります」と即答され、磐梯町として宗教的な建造物を作ることは困難であることは想像できましたが、まして仏像を作ることはさらに困難であろうと思われました。しかし五十嵐町長は「後世に宝物として残るような立派な仏像を必ず作ります」と断言されました。私はその言葉に心を打たれ、史跡慧日寺の伽藍の復元のみならず、みちのく福島に徳一菩薩が仏教を広め民衆を教化した偉大な歴史がこれからも確実に伝えられていくことを確信いたしました。

五十嵐町長が種々の問題を乗り越えて続けられている史跡慧日寺復元事業は後世に残る偉大な功績であります。今後益々のご発展を祈り申し上げお祝いの言葉といたします。



命を与える遣送のほとけ 薬師如来

東京藝術大学大学院教授（文化財保存学）

籾内 佐斗司

私が慧日寺金堂を初めて訪ねたのは、7～8年前のことだったと思う。当時の金堂はできたばかりで、今よりはるかに鮮やかな色彩だった。それからしばらくして、興福寺の多川俊映貫首から「町長さんが、金堂のなかに薬師如来を造りたいらしいから、推薦しといたよ」と言われた。しかし、まさか実現するとは思ってもみなかった。

東京藝大が磐梯町と受託契約を締結したのが2015年のことだが、坐高が2メートル、総高が4メートルを超える木彫像の質と量をまだ実感できてはいなかった。幸いなことに、研究室には古典技法に精通した気鋭のスタッフが揃っている。彼らが塑造で制作した四分の一の雛形の試作は、復元検討委員会の先生方からの厳しい指導もクリアし、いよいよ木曽ヒノキ材が研究室に搬入された。造立当初は、おそらくケヤキの一本造だったと思われるが、現代にそんな巨樹は存在しない。そこで、檜の角材を集成した木取りプランをコンピュータで割り出し、それをもとに組み立てていった。経験豊かなOB教員も参加して、木彫作業は順調に進んだ。また彫刻を終えた木地に麻布を貼り、漆下地を施して金箔を押し、古色を付けるというそれぞれの工程は、ちょっとした移動も含め想定を超える作業だった。しかし、みんなで知恵と力を出し合って克服し、終わってしまえば楽しい思い出しか残っていない。そして本事業が、制作に携わったすべてのスタッフに得がたい経験と大きな自信を与えてくれたことを、心から感謝している。

さて、東方遙か彼方の瑠璃光浄土におわす薬師如来は、日月や星々に命を与え、私たちの天空に送り出してくれる遣送のほとけといわれる。慧日寺の薬師如来坐像が、磐梯町の活性化だけでなく、福島県のひとたちに喜びと活力をもたらしてくれることを願ってやまない。

慧日寺本尊薬師如来坐像の再興の歴史

会津五薬師の東方薬師として広く知られる慧日寺。本尊丈六薬師如来坐像の建立は慧日寺の創建に遡り、金堂の変遷と共に焼失と再興の歴史を繰り返しました。諸記録をもとに、以下にその変遷を紹介してみます。

大同 2 年 (807)	本尊丈六薬師坐像を造立 【「恵日寺縁起」『会津旧事雑考』】
承久 3 年 (1221)	恵日寺に獅子繡有り 【『会津旧事雑考』】
承久 3 年 (1221)	薬師如来御宝前に障子一本を施入 【『新編会津風土記』】
	この間に罹災か？
観応元年 (1350)	大寺薬師安座 【『会津旧事雑考』】
観応元年 (1350)	会津恵日寺薬師堂再興 【『異本塔寺長帳』】
応永 25 年 (1418)	恵日寺火災により 丈六薬師像が燼滅 左手と薬壺のみ焼け残る 【『会津旧事雑考』『異本塔寺長帳』「恵日寺縁起」】
永享 7 年 (1435)	永享 7 年 (1435) 慧日寺金堂鉢奉納 【梵字「バイ」(薬師如来)「鉄鉢銘文」】
	この頃までに再興か？
天正 17 年 (1589)	伊達政宗の会津侵攻により恵日寺焼失 金堂のみ焼失を免れる 【「恵日寺縁起」】
天正 19 年 (1591)	薬師御宝前に「大師行状記」十巻を奉納 (薬師如来の存在 金堂が火災を免れたという論拠)
寛永 2 年 (1625)	恵日寺火災 左手と薬壺のみ焼失を免れる 【『新編会津風土記』】
寛永 3 年 (1626)	金堂火災 左手と薬壺のみ焼失を免れる 【『会津旧事雑考』】 同一の焼失記事、年代の錯誤か？
明暦年間 (1655～58)	保科正之により復興 【「恵日寺縁起」】
万治元年 (1658)	本尊焼失か？再興か？ 【「恵日寺本尊再興之覚」】
貞享 2 年 (1685)	恵日寺の年中行事書上げに「薬師堂に参籠」「薬師御宝前に勧請」などの記録
元禄 2 年 (1689)	「磐梯山金剛院恵日寺御公儀江指上候絵図之下書」の中央に「薬師御堂五間四面」の御堂が描かれている
正徳 3 年 (1713)	本尊再興 本尊・後光・台座ともに総高二丈 【「恵日寺本尊再興之覚」「…堂内屋上裏より敷板迄壹丈七尺縁下三尺御座候 依之敷板を取尊像安置…」】
正徳 4 年 (1714)	本尊再興開眼供養 丈六薬師一鉢 【「恵日寺本尊再興開眼供養覚」】
享保 2 年 (1717)	薬師堂の修復願いを寺社奉行所に提出 【「恵日寺薬師堂修復願之覚」】 その後、藩による恵日寺修復は停止 【「恵日寺修復停止の仰渡さる状」】
享保 13 年 (1728)	58 世実辯、薬師堂再興の勧進 【「磐梯山縁起 (薬師堂造立勧化之牒)」】
享保 18 年 (1733)	58 世実辯、薬師堂再興の勧進 【「大寺恵日寺略縁起」】
嘉永 3 年 (1850)	金堂薬師如来 但 左手薬種壺大師御作 【「恵日寺宝物記写」】
明治 5 年 (1872)	6 月 近くの小屋から出火し薬師堂・鐘楼延焼 薬師化仏は外して避難、仏頭のみ焼け残る →大寺の能満寺に避難
明治 12 年 (1879)	3 月 能満寺虚空蔵堂火災の折に 仏頭焼失 。以後、再興されず

最後にあった本尊は、明治の廃仏毀釈をくぐり抜けたものの、その後間もない明治 5 年の薬師堂の火災で化仏と仏頭を残して焼失。大寺地区の能満寺に避難した後、明治 12 年に再度火災に遭いことごとく湮滅してしまいました。地元の後押しもあって、その後明治 32 年に薬師堂は再建されたものの、本尊薬師如来坐像は、再びその姿を望むことができないまま 150 年近い時が過ぎ去ってしまいました。

薬師如来坐像復元に至る経緯

慧日寺跡では、史跡整備事業の一環として、長年に及ぶ発掘調査の成果をもとに検討を重ね、平成 21 年までに創建時（平安時代初め）の伽藍のうち中核部の金堂・中門の建物復元と石敷広場の復元的整備を行いました。これによって、見学の方々は慧日寺創建当初の状況を具体的・立体的に見ることができ、古代寺院のありようを理解いただけるようになりました。

完成後は、内部にパネルや説明板を設置して一般公開を続けてきましたが、建物内部の情景を具体的に造り出すことによって、その用途や機能がより臨場感をもって理解できるようになると考え、町では創建当初の金堂に安置されていた薬師如来坐像を復元・展示する方針を決定しました。

展示品としての位置付けではありますが、制作にあたっては美術史・彫刻史の専門先生方からなる調査・検討委員会を立ち上げ、学術的な調査・研究のもとに行い、時代・地域にあった歴史資料として、かつ芸術作品としても価値があるものを目指すこととしました。



平成 20 年に復元が竣工した金堂

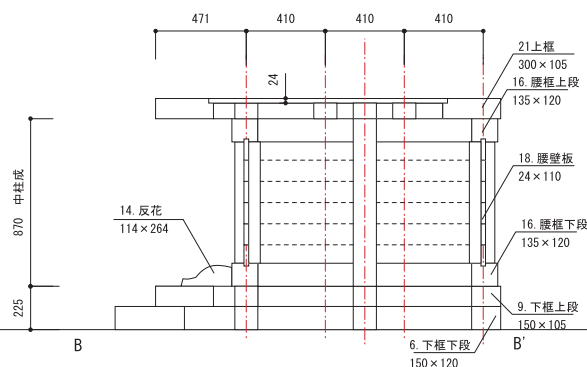
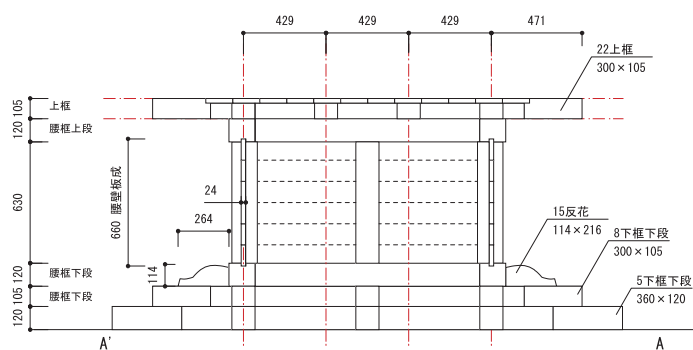
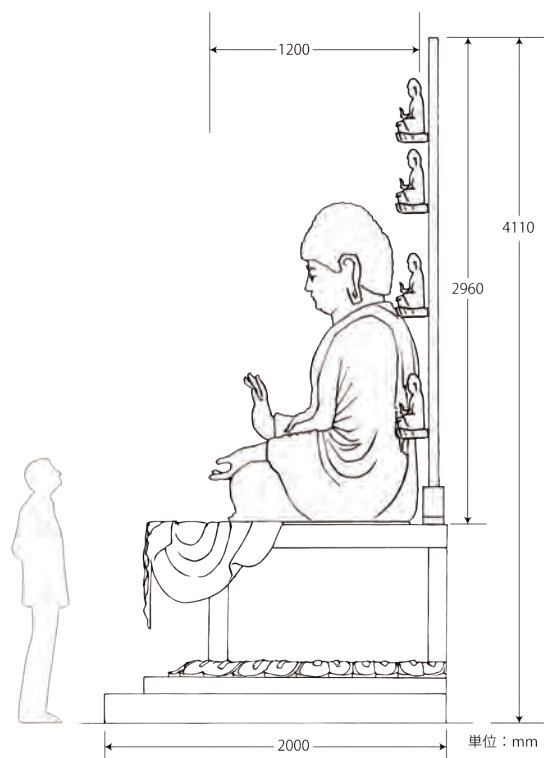
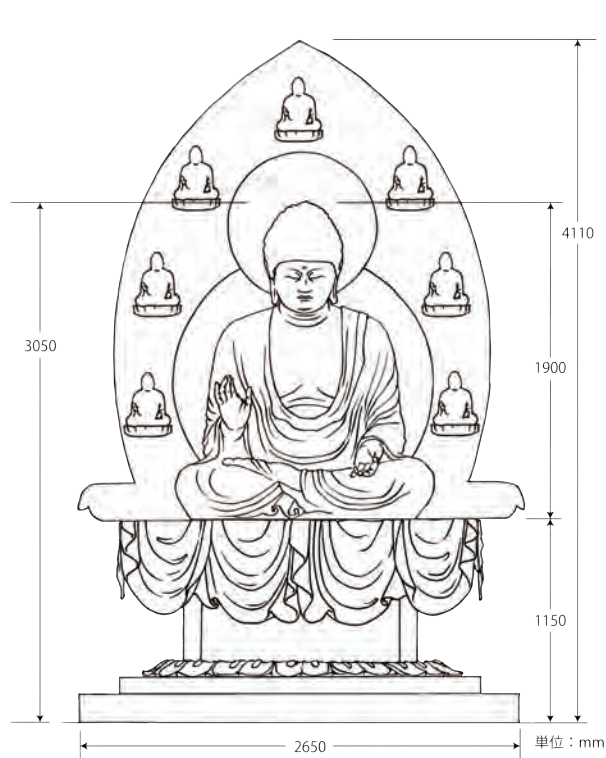


金堂内部の展示状況



整備後の中心伽藍全景

薬師如来坐像復元展示物の概要



各部の寸法と台座構造（抜粋）

薬師如来坐像の復元にあたっては、平安時代初期に制作され現在に遺る様々な像を参考にしています。なかでも通肩と呼ばれる着衣形式・強くうねった二重まぶたや切れ長の眼差し・耳の形状は、造像環境が特に近かったとみられる湯川村・勝常寺薬師如来坐像に則っており、像高や七仏薬師がついた光背、裳懸などは奈良・新薬師寺薬師如来坐像を参考にしています。そのほか、前後に分厚い体軀や量感豊かな肉身部の表現、奥行き狭い両脚部、鎬の立った翻波式衣文など、平安初期彫刻の多くにみられる特徴を取り入れています。

また台座は、時代的背景から裳懸のついた宣字座であった可能性が高いと考えられます。宣字座とは広い上框と下框に細い腰框を挟んだ、「宣」の字に似た形の台座を指します。その構造は巨大な薬師如来坐像の重量に耐えうる強固なものとなっています。

薬師如来坐像復元展示物の完成までのながれ

平成 26 年 11 月 20 日	第 1 回史跡慧日寺跡復元金堂内展示物調査・検討専門委員会 金堂・薬師堂及び本尊にかかる史料等の検討
平成 27 年 1 月 27 日	第 2 回史跡慧日寺跡復元金堂内展示物調査・検討専門委員会 C G 画像や発泡スチロール原寸大模型をもとに金堂内で現地検討会
平成 27 年 3 月 30 日	第 3 回史跡慧日寺跡復元金堂内展示物調査・検討専門委員会 前回までの指摘事項を得て制作した木造縮尺模型を用いた造形の検討
平成 27 年 12 月 17 日	薬師如来坐像復元研究契約締結式
平成 28 年 7 月 22 日	鑿入れ式
平成 29 年 7 月 6 日	第 4 回史跡慧日寺跡復元金堂内展示物調査・検討専門委員会 光背意匠・光背化仏の検討
平成 30 年 7 月 30 日	平成 30 年 7 月 30 日 完成式、一般公開開始

実際の制作のながれ

1. 像高の検討・木取り

C G 画像や発泡スチロール原寸大模型をもとに、金堂内にて像高の検討を行いました。その結果、いわゆる丈六（坐高約 2.4m）ではなく、周丈六（坐高約 1.8m）が適切であることがわかりました。また宣字座の寸法や像とのバランスなどの検討も行った上で基本仕様を決定し、それを基に 4 分の 1 縮尺模型を制作しました。



3DCG を用いた像高の検証



樹脂模型の制作



樹脂模型を復元金堂内に設置しての検討委員会

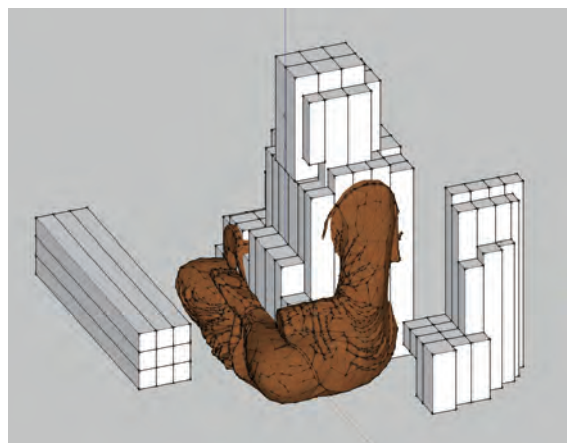


4 分の 1 縮尺模型（木彫）

造像当時の慧日寺薬師如来坐像は、平安時代初期という時代から見て巨木から像のほとんどを彫り出した一木造であったと考えられます。しかし現在ではそのような巨木は極めて貴重であり、彫刻制作に用いることはできません。そこで今回の復元制作では、反りの少ない良質な天然木曽ヒノキを用いた寄木造を採用しました。15cm 角の材を中心とし、本体だけで 100 本以上の材を使用しました。内刳りとして内部を空洞にする部分は無駄になるため、CG も用いてその部分を省いた木取りを行いました。



木曽ヒノキの森



CG を援用した木寄せ設計

2. 台座の制作

薬師像本体の制作に先立ち、宣字座を制作しました。裳懸・反花などの彫刻部分は別々に制作し、慧日寺資料館にて仮組みを行いました。



宣字座の仮組み



反花の取り付け



裳懸の取り付け

3. 図面転写と粗取り

ヒノキの角材はそれぞれ製材したうえ仮組みし、彫刻開始にあたって鑿入れ式を行いました。角材は数本ずつの板材にまとめて図面を転写し、鋸や叩き鑿を用いて大きく量を落としていきました。



図面転写



材木の仮組み



鑿入れ式



粗取り

4. 粗彫り・中彫り

角ばった部分を落としていくと、次第に薬師如来坐像の姿が見えてきます。縮尺模型に基づいて制作しますが、像の大きさが異なることによる見え方の違いにも留意して彫り進めます。



粗彫り～中彫り



頭部の組み付け

5. 小造り・仕上げ

次第に細かな造形の彫刻に移ります。使用する道具も、叩き鑿から小道具・彫刻刀などに変わっていきます。螺髪には一つ一つに螺旋を刻みます。



両手先



手先の取り付け



小造り



主な彫刻道具



螺髪の仮付け



螺髪



彫刻工程がほぼ完了した薬師如来坐像本体

6. 光背・七仏薬師の制作

平成 29 年 7 月の史跡慧日寺跡復元金堂内展示物調査・検討専門委員会において、光背や化仏の仕様が決定されました。化仏、光脚、連珠や植物文様、頭光の八葉蓮華などをそれぞれ制作したのち接合しました。



光背の八葉蓮華



光脚の制作



化仏の光背



化仏の制作



光背の植物文様の制作



光背本体の制作



光背への部材仮付け

□ 磐梯町での公開制作

平成 29 年 10 月から磐梯山慧日寺資料館において開催された第 3 回目の「磐梯とくいつ藝術祭」にあわせ、磐梯町駅前前に整備された工房において 2 ヶ月間の公開制作を行いました。



駅前工房での記者発表



駅前工房での公開制作





駅前工房での公開制作

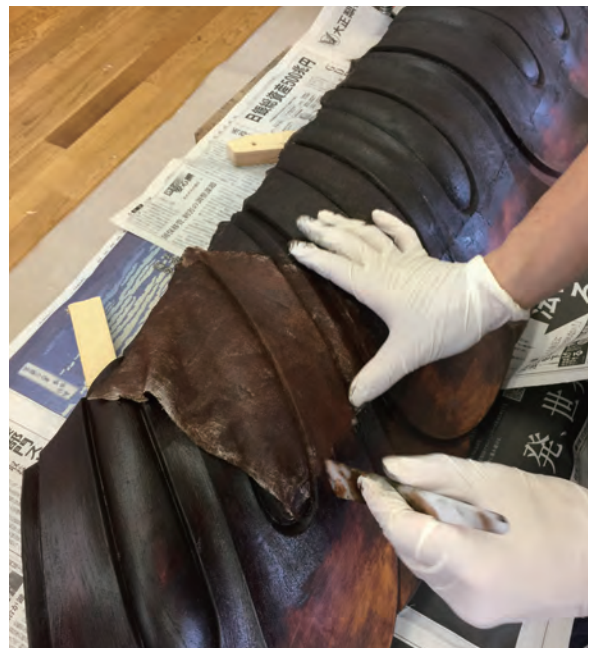


7. 各部材の漆工—布貼り～錆下地—

薬師如来坐像本体・光背・裳懸・反花は漆仕上げとします。はじめに矧ぎ目（角材同士の接着箇所）に薬研彫りしたのち木屑漆を充填し、糊漆を用いて全面に麻布を貼り、さらに錆漆下地をつけます。錆漆とは漆に砥粉などを混ぜたペーストのことで、粒度等が異なる地粉錆・切子錆・砥粉錆を各段階で使い分けます。錆漆を塗っては研ぎ、塗っては研ぎを繰り返し、表面を滑らかにします。

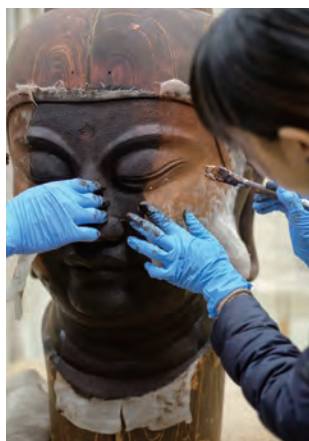


反花の漆下地工程



裳懸の漆下地工程





薬師如来坐像本体漆下地工程



鉋・天平型の釘を用いた固定

8. 各部材の漆工 — 呂色塗り～漆箔 —

滑らかになった表面をさらに平滑にするため、呂色漆（黒漆）を塗り、再び研ぎます。こうしてできた表面に生味漆を擦り込み、金箔を押します。



漆箔前の光背・反花・裳懸





呂色漆塗りの工程



漆箔の工程

9. 彩色と古色付け

制作されたばかりの仏像は鮮やかな彩色や金箔が施されていますが、現代では馴染みが薄いものです。また古像の復元模型という事業の性格上、今回の復元制作では長い時間を経て古色を帯びた姿を再現することとし、その検討のために5分の1サイズの木彫像を制作しました。また宣字座本体は顔料などを用い、木地古色としました。



光背化仏の漆箔



螺髪を取り付け



天然顔料による彩色





古色検討用の縮尺模型



薬師如来坐像本体・裳懸・反花の古色工程

宣字座本体の古色工程

10. 復元金堂内への設置

平成 30 年 7 月、完成が近づいた薬師如来坐像を慧日寺復元金堂へ搬入し、一般公開が始まるまでのあいだ調整作業を続けました。



金堂内への搬入



宣字座への設置



設置した薬師如来坐像



福島県磐梯町